

低温下で単為結果性を有するナス親系統の育成

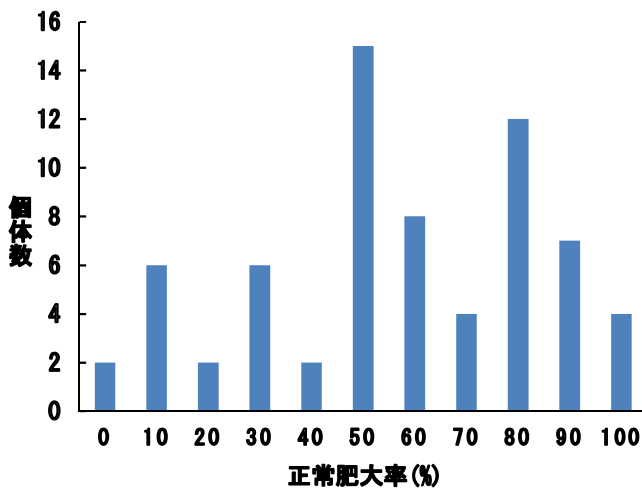


図1 検定系統の単為結果性



図2 選抜個体の果実

近年、ナス栽培においてホルモン剤による着果処理やハチによる授粉がなくても着果、肥大する単為結果性品種が育成されています。単為結果性品種は省力化やハチ導入経費の削減につながることから、本県ナス産地へも導入が進んでいます。しかし、現行品種は、厳寒期に果形が長くなりやすく、収穫の山谷が大きいのなどの課題が指摘されており、産地からは低温栽培が可能で高品質な「高知なす」の新たな品種の育成が求められています。このため当センターでは、単為結果性「高知なす」新品種の育成を進めています。

令和5年度は単為結果性素材として、市販品種の「あのみり2号」と本県育成の「試交60号」の交配後代を用いました。この後代にとげなし性「高知なす」素材「SL13ac1」を交配し、そのF₃世代68個体について、その単為結果性を検定しました。冬期の最低夜温10℃条件で、授粉前の花柱(め

しべ)を除去した後、正常肥大する果実の割合を調査した結果、まったく正常肥大しない個体から、すべての果実が正常肥大する個体まで単為結果性の違いが認められました(図1)。すべての果実が正常肥大したのは4個体で、その果実は卵形や「高知なす」タイプの長卵形などが見られました(図2)。これらの4個体を単為結果性「高知なす」品種育成の素材として選抜しました。

今後は、今回選抜した個体の蒴培養や自殖により、単為結果性の固定を図ります。また、これらに「高知なす」育種素材を戻し交配することで、より「高知なす」に近づけた単為結果性系統の育成を目指します。

(園芸育種担当 岡田 昌久)

088-863-4916)